
自治省の悪臣

雪 柳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自治省の悪臣

【Nコード】

N9340Z

【作者名】

雪 柳

【あらすじ】

ファネ国自治省に新たな政務次官がやって来た！

アギール伯爵令嬢26歳。金茶の髪に黄緑の瞳の美姫。

仕事熱心な若き官僚は日夜苦悩する…名のれば十中八九

「あのアギール家！？」と問い返される日々とうんざり。

何しろ彼女の両親は国内のみならず周辺諸国にまで

名の知られた超・有名カップルなのだ。

伯爵令息であった父と子爵令嬢であった母は幼馴染の許嫁同士。

そのままゆけば周囲から祝福されてゴールインのところ、

時の王女が伯爵令息を熱愛、時の王子が子爵令嬢を偏愛するに至り、まさかの破局の危機。

しかし二人は、王家の完全包囲網を辛くも突破、隣国まで逃れて駆け落ち婚するという快挙？暴挙？に出た！

これは一方では“世紀のロマンス”ともて囃され（↑主に平民から）、

他方では“世紀のバカップル”と非難され（↑主に貴族から）た鴛鴦夫婦の一粒種の物語。

序章 自治省の新人次官（前書き）

初投稿。

伯爵令嬢、でも庶民育ちのリアンが仕事に、恋愛に、と奮闘する物語。

全10話完結（予定）。

序章 自治省の新人次官

年の暮れ。灰色の空に粉雪舞う、何となく重苦しくて憂鬱な冬の日。

ファネ国自治省では異例の人事が行われた。

一週間前に急死した政務次官に代わる後継者が任命されたのだ。

その人は正午の少し前に、自治省役人一同へお披露目となった。省内の大会議室には当直や出張中の者を除いた全員が招集された。数は百名ほど。室内が熱気を帯びるのは、混雑のためばかりではない。

誰しもが異例の人事で余所から拔擢された若き官僚に興味津津なのだ…

何しろ新しく来る次官は若い女性、いやそれはともかく、やって来たのは“あのアギール家の”伯爵令嬢なのだ。

「新任のリアン・パルマローザ・アギール君です。中途半端な時期の登用となりましたが、政務次官を欠員にしておく訳にはいきませんので、陛下と相談して急ぎ人選しました。」

地方役人の経験あり、隣国イサへの留学経験あり、と実力派の方と聞いています。一同、力を合わせ、この自治省を盛り立ててください」

優しい口調で、しかし当たりさわりのない紹介をしているのは自治省

長官キリルである。

まだ三十前であろう若き青年が長官をしているのはその出自ゆえ。

醸し出す雰囲気が高貴で所作の一つ一つが洗練されているのも当然で、

現国王の叔父君にあたる正真正銘の王族出身者だ。今は臣籍に降り、ミルケーネ公爵を襲名している。

しかし、自治省役人にとって目下の関心は長官に対してではない。その傍ら、半歩下がった位置に控えめに立つ人物。

「ただ今、ご紹介にあずかりましたリアンです。地方行政の充実と基盤

整備に精一杯つとめたいと存じます。

皆さま、どうぞよろしくお願い申し上げます」

（あれが…）（あのアギール伯爵令息とあのフェヌイ子爵令嬢の娘…）

（今は亡きリウカ王女を袖にした男の…）

（ワグナ殿下を振り切った女の…）

好奇心むき出しだが、意外に悪意がこもっていないのは、自治省役人の

多くが下級貴族もしくは平民出身であろうからか。

新人次官を迎えるだけにしては熱すぎる視線がリアンに注がれる。

なかなかの美姫…誰もがそう思った。

緊張からであろうか、ぎこちない微笑みを浮かべつつ、

丁寧に頭を下げた新任次官。

伯爵令嬢でありながら黄緑色の瞳には少しも威張った様子がない。

金茶の髪はすっきりと頭の後ろで団子状にまとめられている。

王族出身のキリルと並んでも少しも見劣りしない。

黒髪に藍色の瞳をもつ長官とは色彩的に合わないかもしれないが、

美男美女の一对なのは間違いない。

下級役人の何人かは早くも長官と次官のロマンスを妄想した。

しかし、キリルの引き際は早かった。

「それでは後のことはヴァンサランに頼みます」

扉の前に立っていた側近に声をかけ、新人次官に二言三言ばかり何か

囁くと、長官はさっさと大会議室を後にしてしまった。

(((そうだった...)))

あつという間に姿を消した長官に、部下一同は声なき声でつぶやく。

王族出身大貴族が要職につくのは珍しいことではないが、その実、名ばかりのことなのだ。

自治省長官の優雅な、といえは聞こえが良いが、ぐうたらな暮らしぶりは、結構下級役人にまで知られていた。

「それでは皆さんお疲れ、昼飯にしてくれや」

ざつくばらんに声がけすのは、赤毛の大男。官吏というより剣闘士、

という体型だが、立派に自治省役人である。それも事務局長。

長官と政務次官を補佐する高官の一人だ。

「あ、その前に」

新人次官に個別挨拶しようとする者と食堂に向かおうとする者で人の流れができる前に、待ったがかかった。

リアンの手にはいつの間にか紙の束が握られている。

「簡単なアンケートにご協力ください。
お昼前にあまりお引き留めしてもいけないので、制限時間は10分。」

書きあがった方から退出していただいて結構です。
今から私語厳禁ということでスタートしてください」

アンケート用紙があつたという間に配布され、よく見れば筆記用具も会議室の四方に寄せられたテーブルの上に配置されている。

ヴァンサランが何か言いたげな視線を向けてきたが、リアンはそれをさらりと流して、アンケート回収箱を彼に渡した。変な時期の就任なので、少しでも早く正確な状況認識がしたくて、よろしく願いますね、などとゴニョゴニョ述べながら、新任

次官は

自治省役人一同の間を縫うように歩き回る。

仕事熱心な人なのだな、と一応は好意的に受け止められたものの、アンケートの中身を見るや、その場の大半がビシリと固まることとなった。

熱気を帯びた室内が一転、何やら冷たい汗が背中を伝うのは、十人二十人ではない…実際のところ半数以上だ。

((…これは))

新人次官の就任直後、アンケートという名の抜き打ちテストが彼らを待っていたのだ。

*** **

吹き
バーンと執務室のテーブルが派手に叩かれた。赤インクのペンが

飛び、書類数枚が絨毯の上をハラハラと舞う。

黄緑色の目を吊り上げ、フルフルと拳を震わすのは、年の暮れに就任

した自治省の新人次官リアンである。

「なんで、こんなに、ド阿呆ばかりなんだっ！

この役所ってどうなってるの！」

怒りの矛先は自然、補佐官であるヴァンサランに向けられる。

「いや、でもよ、正直どこもこんなもんだぜ…

俺としては平均正答率47%っていうのは、むしろ

“良くがんばりました”ってトコ。

みんな半分くらいは書けていたってことだろ」

「自治省の役人のくせに、ファネ国16州が全部書けないってどうなの？

初等教育レベルでしょうに。

でもって長官の趣味を書けという設問に “全国各地の地酒収集”と

回答した人98%。これって正解なの？正解にして良いの？

それから本年度各州に分配される特別予算の総額を書く設問は正答率7%

…ふざけてんの？省内教育ちゃんとやってんの？」

沸々と血圧が上がってくるのが自分でもわかる。

リアンは就任初日から自治省の厳しい現実にさらされることになった。

ファネ国中央官庁の中で、花形官職と言われるのは財務省や内務省であり、自然そちらには権力志向が強い者が集う。

自治省や工部省はどちらかというと地味なイメージだが、それでも国家予算の振り分けが大きく、地方に与える影響力が絶

大だ。

（その役人がまさかの無能ぞろい？ いや、州の名前全部言えなくても、

特別予算額 知らなくても 政務はできるのか？

いやいやいや、ありえない、落ち着け私）

内心激しく動揺しつつ、リアンは何とか自分を抑えこんで能面を被ろうとした。

目の前のヴァンサランは気さくな人物だが、なんといっても

「長官側」の人間 なのだ。

事前情報としてリアンは彼の養父がミルケーネ公爵の肩書を持つキリルの執事をしていることを突き止めていた。

ここで醜態を見せれば、後で何と長官に報告されるか知れたものではない。

（仕事熱心なものいいけど、ほどほどにね、リアン）

不意に、長官が退出間際に耳打ちした言葉が甦ってきた。

熱い吐息が耳朶にかかり、肩ほどに束ねられた黒髪がほんの少しリアンの頬に触れた、その一瞬。

自分より少しだけ年上と思われる若い長官の何気ない仕草に、ドキリとした。 絶対オモテには出していない自信があるけれど。

（あれって計算してやっているなら結構ヤバイ長官だよな。

でも、計算しないで やっているならもつと面倒な気も…）

就任挨拶のために初めて長官室に足を踏み入れた時、リアンは悟った。

この長官は仕事をする気が全くないのだ、と。

そこは仕事部屋ではなく、大貴族の豪奢なサロンのようだったからだ。

そして握手のために差し出された右手は白絹のように白磁のように滑らかで透けるほど美しかった。

（働かない人の手ですね…）と、心の中だけで彼を咎めた。
しかしながら、単なるグータラ大貴族と決めつけるのは早計だ。
リアンはなぜかあの優しそうな雰囲気の中に静かな計算があるよ
うな

気がしてならない。

「で、明日から何か改善策出すんですか、リアン？」

トントンと机の端でアンケート用紙をそろえながら、ヴァンサラ
ンが

声をかける。

礼儀にうるさい連中が周りにいる場合を除いて、

敬称抜きで呼び合うことを二人は初対面の時に決めていた。

リアンの方が上官だが、自治省での経験値はヴァンサランの方が
上だ。

「…そうだな、明日から鬼の政務次官の呼ばれるよう、
務めるようにする」

間違っても“アギール家の伯爵令嬢”などという間抜けな呼称で
はなく、

と言外にリアンは告げた。

序章 自治省の新人次官（後書き）

両親は駆け落ち婚。大ハッピーエンドのその果てに。

一人娘のリアンはイロイロなツケを払わされることになります。
しかしそこは逞しい彼女のこと。

あまり心配せずに暖かく見守ってくだされば何よりです。

第一章 自治省の有閑長官（前書き）

今の時代、こんな長官いたら袋叩きになるでしょうね…

高給取りのくせに、仕事をほとんどしないで遊んでいるのですから。

しかし一方では、こんな優雅な生活をちよっぴり体験してみたいものです。

第一章 自治省の有閑長官

ファネ国王都キサラ。

北辺に聳えるカプレス山脈を背負うように王府が築かれている。

中央省庁の多くは王府南面にある建物群のに集中している。

自治省は南東門からほど近い旧称カリン宮の東棟に在り、

同じ宮の中央棟には商務省、西棟には工部省が入っている。

4階建ての建物の最上階、東棟中央にバルコニーを抱えた

豪華な部屋が自治省長官キリルの執務室である。

王族出身、現国王の叔父君、そしてミルケーネ公爵である青年。

彼のために用意された部屋は、工部省長官と商務省長官のそれとは

明らかに…誰が見てもそれと分かるほどに、格が違っていた。

一応キリル以外の二人の長官室も各棟の最上階に位置している

のだが、その規模はずっと小さい。

自治省長官室にのみ言えること。

調度品の多くは繊細な彫刻が施された黒檀づくり。

寄木細工の床をほとんど隠してしまっているのは、

高山地方の穢れなき乙女が10年以上かけて織るという厚手の絨毯。

毎日公爵家から執事が銀器を磨きにくる。

毎日公爵家から専属の庭師が新しい花を活けにくる。

長官のためだけに用意された侍女2名、調理師1名。

…要するに役所の仕事部屋ではなく、大貴族様のサロンなのだ。

「リアン、君の好きなようにしたら良いよ」

ヴァンサランを伴い、朝一番にやって来たリアンに長官はあっさり

承諾の意を示した。

朝一番というのは、キリルが自治省でその日最初に面談した人物という意味で、その実、正午に近い。

リアンは就任二日目にして誰よりも早く来省し、バリバリ仕事をこなしていたが、若き公爵サマは予想を“裏切らず”、重役出勤であった。

「ええと、提案書をきちんとご覧いただけましたか？」

よろしければ本日午後からでも実行に移したいのですが」

昨日のアンケート、もとい、抜き打ちテストと、幹部のみが閲覧できる

人事調書を参考にして、リアンは少しばかり自治省内の組織を動かして

みることにした。

長官に手渡した提案書にはその具体的プランがまとめられている。

一応、キリルは最初の頁から最後の頁までパラパラと目を通した。

1頁、1秒。

それで内容把握ができるなら、あんたはどんだけ天才なんだ、とリアンは心中穏やかではない。

提案書はあつという間に彼女の手に戻ってきた。

末尾に長官のサイン（それだけで芸術のような筆跡！）と

角印（宝石としても十分通用する等級の翡翠製だ！）が付されて。

「さて、少し早いがお昼にしましょうか。リアン、そちらにどうぞ。

サラン、君も一緒に食べよう」

リアンの言葉を待たず、キリルが銀の呼び鈴を一つ鳴らす。

たちまち二人の侍女が現われた。

一礼するや二人は息のあつた所作で中央に置かれた長テーブルに
レース編みのクロスをかけ、銀食器を並べてゆく。
クロスにも銀食器にも公爵家の紋が入っている。

一応、自治省の紋が入った高官用の食器もあるはずなのだが。

（ああ、このお貴族様め）

リアンは作り笑いを浮かべるのも嫌になった。

彼女とて貴族出身、まごうかたなきアギール伯爵令嬢である。
しかし、両親が駆け落ち婚をした煽りをもろに喰らい、
その人生のほとんどは庶民暮らしであつた。

政務次官就任のために不本意にも貴族の肩書を持ち出す
ことになってしまったが、彼女に伯爵令嬢としての自覚は
皆無である。

（午前中にした仕事書類1件の決裁だけって、どうなのっ）
リアンは目だけでヴァンサラに問うた。

彼は肩をすくめただけで何も言わない。

キリルは瞳の色に近い藍色の服を好んで着るようだった。
上着はだらしがない…とまではゆかないが、かなりゆったりと
銀系の入った帯で結ばれている。

肩までの黒髪は藍系と銀系を撚った組み紐でまとめられていた。
およそ仕事向きの装束ではないが、王族出身の若様には
よく似合う。しかし見とれている場合ではない。

「長官、せっかくのお誘いですが、就任したばかりでまだ立て
込んでおりますので。昼食会はまた後日にでも。
サラン、行こう」

リアンは不遜にも公爵サマのお誘いを断って踵をかえした。
ヴァンサランは侍女の手にした籠からひよいひよいと
幾つかパンをつまんで抱え込むと、リアンの後を追う。

「リアン」

挨拶もそこそこに、ほとんど逃げるように部屋を出ようとした彼女を
キリルは呼び止めた。

厚手の絨毯が敷かれた床は靴音を消してしまう。

ゆったりと羽織られた上着の衣擦れの音だけが微かに響いて、
あっという間に、長官が目の前に立っていた。

そのまま少し前かがみになるようにして、リアンの目線と同じ高さ
に、

顔を近づけてくる。

（いや〜っ。近い、近い…なんなの、このヒト）

昼の光を浴びて、藍色の瞳が輝く。底知れぬ煌めきを湛えて。
どこまで意識的にやっているのか、まだ読みきれないが、
自分の美貌が女性全般に及ぼす効果を熟知しているに違いない。

「リアン、政務次官として貴女がやるべきと信じることをやりなさい。
い。

でも、約束なさい、仕事のために自分の命を危険にさらさないと」

「は、い、長官」

必死の能面顔も保てなくなり、リアンは何とか返事をした。

「それから、私のことは官職名ではなく、名前で呼んでください。

歳も近いですし、堅苦しいのは抜きにしましょう」

仲良くしましょうね、そう小さく付け加え…

何と公爵サマはその白絹の手でリアンの頭を撫でたのである！

（ぎゃああゝやめて、何これ、セクハラ？パワハラ？）

昨夜も今朝も時間なくて、洗髪していないのにーっとうとうでも良いこと

まで思い浮かべて、動揺激しい新米次官。

しかし彼女はすばやく立ち直った。

「長官を名前で呼ぶなど、とんでもございません。

恐れ多いことにございます。

それではこれにて、御前失礼いたしますっ」

ヴァンサランがすぐ横でひどく面白そうに若き長官と若き次官を交互に見比べていた。

しかし、リアンにはそんな補佐官の様子に気づく余裕はなかった。

繰り返すが、リアンは庶民育ちである。

18の歳より4年間、地方都市ルーマで下級役人を経験している。

その後、州の奨学金を得て、2年館、隣国イサへ留学している。

つまりは一般的な貴族の箱入り娘に比べれば、人間関係の上で相当鍛えられているのだ。

男女の関係もそれなりに…まあ、豊かとは言えないものの、

深窓の姫君に比べればずっと経験値があるはずだ。

王族出身とはいえ、身にまとう高貴さに中てられたとはいえ、
ぐうたら長官にドキドキするはずなど、断じてないのだ！

「サラン、長官っていつもあなの？」

ヴァンサランが長官室から要領よく持ち出したパンを受け取ると、
白いハンカチで包んで袋状にして、階下に運ぶ。

昼食をとりに行く時間がほとんどないのを察したのか、赤毛の大男は意外によく気のつく、優秀な補佐官である。

「ああって？」

「…天然タラシ」

「お姫さまが使う言葉じゃねーな」

「お姫さまじゃないから、私。知っていると思うけど」

「長官はどちらかというと女嫌い、いいや、人間嫌いな方だと思っよ…」

どう説明したらいいのか、ヴァンサランは困った。別に口止めされているわけではないのだが、リアンのことを相当気にかけていることを今この時点で言っべきかどうか。

キリルがリアンに対したこの二日間。

ヴァンサランを補佐官として直近の部下に配したこと。

自分から手を差し出してまで、リアンと握手したこと。

耳朶に唇が触れそうなほど近づいて、何か囁いたこと。

官職名ではなく、名前で呼ぶように頼んだこと。

危ないことはするなと言って、頭を撫でたこと。

一見すると何気ない言動のようで、しかし、だ。

長官の本性をよく知るヴァルサランにとっては、そのどれ一つをとっても「ありえね〜」「誰だこいつ〜」という事態である。

実はあの人、いろいろ難しい人なんですよ〜気を付けてくださいね、と正直に警告するわけにもいかず、ヴァンサランは口をつぐんだ。それを見て、リアンは、やっぱり彼は「長官側の人」だ、と思いパンの一件で下げられた警戒度をまた少し戻すことにした。

（負けるな、私…）

階下の自室に向かってリアンは走った。

*** **

午後の優雅なひととき。

自治省長官は客人と差し向かいに座って、香茶を飲んでいた。

場所は、中央バルコニーに設けられたサンルーム。

ミルケーネ公爵と彼の迎える客人にのみ許された特別な場所である。

「例の娘がめでたく自治省に就任したそうだな。

中央での業績皆無の者を 政務次官にとは、また思い切ったことを。」

陛下の弱みを何かつかんで、取引したのか」

客人は口髭をはやした中年の紳士である。

キリルと同じ癖のない黒髪は短く切りそろえられている。

やはり同じ藍色の瞳はしかし、ぐっと鋭く威圧的ですからある。

そして王府内でも帯剣を許されているのは、この男が軍人である証だ。

「…人聞きの悪い。きちんと仕事ができると思ったからこそ抜擢したのでしょ」

「ふん、田舎でちょっとばかり役人をやっただけで、人を動かせるようになるものか。留学経験だって高が知れている」

「そういう貴方だって、数年前から突然、女性官吏の登用やら女性の爵位継承やらに積極的になりましたよね」

…誰か、王府に呼びたい女性でもいたのですか、キリルの目はそう問いかけている。

「私を出し抜いて、あの娘を囲いこんだつもりか…公爵」

「とんでもありません。私はただ、私の“可愛い人”がこの王府で

「どれだけ自分を通せるのか見てみたいと思っただけです」

そのために少々お膳だてしただけです、とキリルはいたずらをした子どものような顔をした。それを見て客人は苦笑する。

「お会いになりますか？ここにお呼びしてもいいですよ」

「いらん。会いたい時は自分で会いに行く。お前の指図も受けん」

客人は大げさなことを嫌い、非常用の隠し通路を使って

自治省長官室を訪ねていた。

したがって、彼の来訪をリアンを含む階下の人間は誰も知らない。

「先ほど、隠し窓から少しばかり観察させもらった。

政務次官付の数名を凄い勢いで叱り飛ばしていたぞ

…あれはとんでもないジャジャ馬だな」

「とかく地味な自治省もここに来て活気づきそうですね」

「黄緑の、ペリドットの瞳が…“あの人”と一緒にだった」

客人から遠い昔を懐かしむ、愛おしくも切なくなるような声が漏れた。

キリルは香茶を口を含むふりをして、しばし沈黙する。

相手が「あの人」のことを語り始めたら下手に追及してはならない

…過去から学んだ教訓だ。

「だが、金茶のくせ毛はあの男譲りか。

気に食わないな、どうしてくれようか」

客人の表情が一転、憎しみの色が暗く激しく浮かび上がる。

腰に佩いた剣で金茶の髪を首ごと落としかねない勢いだ。

しかし、彼にあの娘は殺せない…キリルはそう確信している。

「殿下、私の“可愛い人”をいじめるのも大概にしてくださいね」

「お前の指図は受けんと言っているだろう。」

第一、お前のモノじゃない」

「さて、私たちは敵同士ではないはずなんですがね」

…ここでのいがみあうのは得策ではないですよ。

客人の空になったカップに手ずから香茶を注ぎながら、
自治省長官は心とろかすような笑みを浮かべた。

第一章 自治省の有閑長官（後書き）

キリル長官の“可愛い人”と客人の“あの人”。なんかビミョーです。

客人が何者かは第3章で出てきます。ひげ面軍人のおっさんですが、準主役級の方です。

ちなみに二人が飲んでいた「香茶」は紅茶に数種の薔薇の花びらを合わせた

公爵家オリジナル・ブレンドです。もちろん茶畑も薔薇園も領地にあります。

第二章 自治省の美貌小姑 その1（前書き）

年の代わる前に何とか更新を…

急いでうどんを食べて（我が家はなぜかそばではなくうどん）、年内すべりこみを目指しました。

が、アギール家ほのぼの話を挿入したらちょっと長くなってしまいましたので

2回にわけます。

第二章 自治省の美貌小姑 その1

自治省政務次官の朝は早い。日が昇る前に起床して、身支度を始める。

就任して一週間が経つが、まだ一度も王都内にあるアギールの屋敷に帰っていない。

祖父であるアギール伯ハリドと叔父にあたるシャイン子爵クロンには「ごめーん、一カ月は帰らないから許してね」と先に謝つてある。

二人は年末年始をリアンと過ごせないことを、とても、とても残念がり…

「おじいちゃんと一緒にジャオズを食べてくれないなんて」

「おじちゃんと一緒にショウコ酒を飲んでくれないなんて」

と終いには泣き落としにかかったが、リアンの心は変わらなかった。

ちなみに、ジャオズというのは、小麦粉をこねたものに肉野菜を包んで

蒸した料理だ。

リアンが隣国イサに留学していた時に習ったもので、

なんでも極東にある一大帝国の名物料理、特に正月に好んで食されるもの

らしい。

ショウコ酒というのも同じ国の特産で、琥珀色をして芳醇な酒だ。

隣国イサはファネ国以上の国際都市で、リアンは滞在2年の間に随分と

世界の美酒美食を堪能した…もっとも大衆料理・安酒限定であったが。

王都に来たばかりの頃、「おじいちゃんに」に手ずからジャオズを作って

ご馳走したら、大変なことになった。

長く離れ離れに暮らしていた孫娘の心づくしに祖父ハリドはいたく感動し、

涙と鼻水でぐちゃぐちゃになりながら、ジャオズを頬張ったのだ。

その後すぐ盛大にむせて、さらに騒ぎが大きくなった。

庶民暮らしで自活能力が備わったリアンを逆に不憫がり、祖父も叔父も

とことん彼女に甘かった…嬉しい反面、過剰な家族愛はちょっと面倒くさい。

くれぐれも役所に顔を出してくれるなと釘を刺しておいたが、いつまで保つか。

直接出向かぬ代わりとばかり、日に三度、やれ弁当だ、菓子だ、着替えだと

召使いに差し入れを届けさせている。

(どこの令嬢だよ…あ、伯爵令嬢なんだっけ)

というボケとツツコミをリアンは一日数回脳内で展開している。

実はファネ国の中央官庁は4日間の冬季一斉休業に入っていた。

大晦日と正月三日はどの役所もお休みで、緊急事態に対応するための当直がごく数名日替わりで詰めているほかは、どこも閑散としている。

自治省にしても通常であれば150名ほどいる人員が、休業期間中は二割に満たない。

リアンは政務次官として休暇中であっても

“非常時に直ちに駆けつけられる場所”にすることを求められるが、省内にずっと詰めていなければなるぬ義務はない。

本来は王都内にあるアギール伯邸に待機していれば十分なのである。

何しろ、アギール伯邸と王府はそう離れていない。

徒歩であれば1時間以上かかってしまっただろうが、車を使えば10数分で済む。

近距離にもかかわらず、祖父と叔父の懇願を蹴ってまで自治省に居座るリアン。

…「地方行政の充実と基盤整備に精一杯つとめたいと存じます」
就任演説で述べた言葉は嘘ではない。

彼女は省内に設けられた参考資料室と自分の執務室を行ったり来たりしながら、猛烈な勢いで過去の報告書を頭に叩き込んでいた。

一朝一夕で何がどうなるというものではない。

けれども、ファネ16州が全部言えないような自治省役人がありえないように、

省内の仕事がどう回っているか知らない政務次官というのもありえない。

…まあ約1名、何もしないのが仕事と豪語しそうな上役がいるにはいるが。

ひと気のない役所で、だからリアンは少しでも役職に相応しい人物になろうと

独り努力する。

…それともう一つ。リアンが何とか解きたいと思っている謎。

（私を政務次官に任命したのは一体誰…？）

26歳の…貴族としては行き遅れの女。

地方都市でたかが4年、下級役人をやっただけの。
隣国イサにただか2年、留学してただけの。

“世紀のロマンス”カップルの娘だからどうだというのだ。
いきなり中央官庁の一つで、長官に次ぐナンバー2なんてありえない。

（そんな無茶な人事がなぜ通った？誰が賛同した？何のために？）

リアンが地方都市ルーマで下級役人をするようになった頃から度々
せめて彼女だけでも王都に戻ってくるよう、親戚一同から懇願され
ていた。

2年前に、とある悲劇が彼女を襲って以後は、その声がますます大
きく

なった。

しかし、彼女が最終的に折れたのは、祖父の、

（自治省に欠員が出たようだよ…少し中央で働いてみないかい？）
という誘いだった。

その時は、下級職だと思っていたのだが。

来省初日にキリル長官から手渡されたのは「政務次官」の記章。

祖父はたぶん騙された。リアンは何かウラがあると感じつつ、この
話に乗った。

どんなウラがあるうと。

（私は私のやるべきと思うことをやるだけなのだから…）

始まりの月、三の日。官公庁仕事始めを明日に控えて。

政務次官の執務室を書類の山で埋めながら、リアンは苛々し始めて
いた。

彼女が本当に見たいと思うものは出てこない。自由に動ける時間は

残り少ないのに。

そこに躊躇いがちに扉を叩く音がする。

就任数日目にして、新人次官は早くも自治省の過半数から恐れられるよう

になっていた。

「次官殿、お客さまです…」

運悪く本日の当直となった役人が、おずおず顔を出すや来客を告げた。

「この時期に…？」

冬季休業期間中である。緊急時ではない限り、客は来ないはずだが。

「シヤララ王妃の女官が書状を持ってお見えになっています」

「王妃様の…？」

伯爵令嬢とはいえ、26年間の人生の中、王族との接触は皆無であった。

しかし、王妃付き女官という一点でリアンの脳裏に閃くものがある。

叔父クロンの警告。

自治省就任するや時をおかずに現れるであろう要注意人物が二名いることを予め告げられていた。

その内の一人が王妃付きの女官。

「どなた…？」

なにくわぬ顔で問いながら、リアンの頭の中にはすでに相手の名前が浮かび

上がっていた。

「フツサル伯爵夫人フロネさ…」

「…わたくしをいつまで待たせるつもりなのっ！」

当直役人が言い終える前に、派手に扉が開け放たれる。
現れたのは正統派美女。

波うつは金の髪。薄紫の瞳。白磁の肌。桜色の爪。
唇には珊瑚色の口紅が乗せられているが、化粧自体はごく控えめ。
それは逆に化粧をする必要のない美貌ゆえ。

女官にはそれぞれ仕える主人と官位に応じて定められた制服があるが
本日は私服にてご登場。

濃紫の絹地にふんだんに金糸を施した

…恐ろしく派手なドレスを「自然に」着こなしてしまっている。

（出たな要注意人物その1…）

そんな内心を綺麗に隠し、リアンは右手を胸に当てて、正式な礼を
とった。

官位は政務次官の方が上だが、王妃様の書状を携えた女官に対して
礼を

欠いてはならない。そのまま、上座の席に案内する。

当直役人は役目を果たすやあっという間にいなくなった。

女官が腰を下ろすと、リアンも真向いに坐した。

睨みつけるようなヴァイオレットの瞳に感情を消したペリドットの
瞳が
ぶつかる。

「…わたくしのことは、どうせあのしみったれ伯爵やくだらない子
爵から

聞きおよんでいるでしょう」

「…どなたのことを仰っているのか分かりかねますが、シャララ王

妃様付き

女官の一人にフツサル伯爵夫人フローネ様という方がいらっ
しゃる

ことは聞き及んでいます。

むろん母君が国王陛下の姉君にあたるということも」

リウカ王女。

リアンの父クロスを派手に追いかけ回し、時の権力を振りかざして
母ミアンとの中を裂こうとした張本人。

しかし、非難めいたことは一切口にしない。既に亡き御方であるゆ
え。

リアンの父母が駆け落ち婚した後、王女は前国王の命令で降嫁した
が、

フローネを生んで一年も経たない内に没している。

「狡賢いアギール伯爵と卑怯なシャイン子爵に、あることないこと
どうせ吹き込まれているでしょう。田舎育ちの娘が、いやらしい
こと」

「…王妃様の書状をお渡しいただけますか」

あからさまな敵意を完全無視して、リアンは相手に本来の用件を
思い出させる。

いや、フローネ自身の目的は分かっている。リアンへの宣戦布告だ。
王妃の書状など口実に過ぎない。

「わたくしの話を聞いているのっ!」

「フツサル伯爵夫人」

この無礼者、とばかり椅子を蹴って立ち上がった女官に時を同じく
して

リアンの容赦ない声が飛ぶ。

「私にはしみつたれで狡賢い祖父も、くだらなくて卑怯な叔父もい

ません」

「身内の^{ひいき}贔目と言うわけかしら」

「そうかもしれませんが。ずっと離れて暮らしていましたが“私たちは”」

仲良し家族なので」

言ってしまったから、地雷を踏んだかな、と少しばかり後悔する。

案の定、フローネの薔薇色の頬が色を失った。唇がきつく噛みしめられる。

“私たちは”という部分を特別強調したつもりはない。

しかし、「貴女たちの家族とは違って」という意味にとられたことは明白だ。

「本日の3時、王妃様が非公式のお茶会を開かれます。

政務次官殿をお招きしたいとのことですので、刻限までにエリエ宮を

訪れますように」

凍るような声でフローネはそれだけ述べると、王妃の書状を卓の向こうから

こちら側に滑らせるように寄越した。

本来は手ずから渡すのが礼儀だがリアンは咎めなかった。

リアンが書状の封印を解いて中身を確認する前に、フローネは執務室から

姿を消した。登場と同様、退場も慌ただしい。

（何か…勝っちゃった？）

初対面でガチンコ対決をする気は毛頭なかったのに、やはり身内を悪く

言われて少しばかり毒を吐いてしまったらしい。

リアンはこの後に控えている“非公式のお茶会”とやらに思いめぐらして憂鬱になった。

残念ながら、お断りするという選択肢はない。

上司との昼食会は回避できても、これは断れない。フローネもそれを分かっている、リアンの都合を一切聞いてこなかった。

（端的に述べると、煩い、邪魔、面倒、時間の浪費、という感じがな）

叔父クロンの人物評が甦る。

確かにフローネの登場で、午後の貴重な数時間が潰れることになった。

王妃様とお茶？恐れ多いことながら、当日いきなりとは本当に煩わしい。

（…でもあれで、本質は邪悪じゃないからさ。

まあ、お姫様のストレス解消と思って、時々は相手してやってよ）叔父は前半で酷評しながら、何のつもりか後半でフォローした。

（確かに…分かりやすい。あれだけ「お前が嫌い」というのを正面から

ぶつけられると、いつそ清々（さすが）しいと言うか…

ウラがなくてかえって憎めない）

フローネが聞いたら、地獄の釜が開くほど激怒しそうなことをリアンは悠長に考えていた。

*** **

その日の午後。

一応アイロンのかかっている礼装用の上着に改め、髪をまとめ直し、化粧を薄くのせて、リアンは訪問準備を整えた。
手にはこころばかりの贈り物を携えている。

いざ出陣、と覚悟を決めて、執務室の扉を開けたその時。

黒髪を肩に揺らし、袖も裾も長い神代の装束をまとった貴人が
目の前に立っていた。

「…その恰好で行くの？」

藍色の瞳がリアンを覗き込んだ。

（…その恰好で行くんですか？）

同じ台詞を心の中だけで返した。

リアンの前に贅を尽くした衣装で現れたのはもちろん、ミルケーネ
公爵。

自治省長官キリルであった。

第二章 自治省の美貌小姑 その1（後書き）

次回キリルが活躍…はともかく、ファネ国王家の人物関係が少し明らかになります。

キリルとリアンの距離は…なかなか縮まりませんね、ごめんなさい。

その2は元旦から更新予定。がんばります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9340z/>

自治省の悪臣

2011年12月31日22時47分発行